

死んだら終わりではない

雲と海は離れています。しかしその本質は一つです。水蒸気になったり雨になったりして、水の精は天地を循環して山河を流れます。生と死は、水と波のようなものです。死は新しい生へのうねりです。念はさまざまな波をつくる水源です。

私たちの寿命もこれと同じで、迷ったままでは尊い^{いのち}生命として生まれ変わることができません。それゆえに、生前中に念を浄化しておく必要があるわけです。

生死はくりかえしていますから、死のなかで生きているといえましょう。死に向って生きているのです。「死んでどこへゆく」という不安は、心の迷いです。死は自分自身の問題ですから、日常の信仰が必要です。生きてきたようにしか死ねないのです。生きているときに念じていたように、次の生へ波がうねっていきます。

この世は、様々に起きる問題をどのように対処していくかが問われる修行の道場です。あの世も修行の道場です。死者の霊が迷ったままでは、娑婆に転生^{*}してやりなおしの修行をすることもできなければ、仏になることもできません。いつまでもさまよっては亡き魂は昇華することができません。それゆえに、中陰^{*}(^{ちゅういん}中有ともいう)の迷った状態から抜け出すには、僧侶の回向^{*}(^{えこう}回向)や遺族の慈愛の念が不可欠となるわけです。

死者の放置は浮かぶ瀬のない闇路の旅人と同じです。その魂はいつまでもさまようばかりで、安らぎがありません。最近では宗教儀礼を省略した葬儀や散骨が一部でなされていますが、これは一考を要するゆゆしき社会現象です。

^{*}娑婆に転生＝耐え忍ぶ人間世界に戻る。 ^{*}中陰＝死後 49 日間をいう。 ^{*}回向＝死者の成仏を祈ること。